

多様性の時代になぜユニゾンを踊るのか

—第 73 回ダンスコンクールの記録—

保健体育科 丸 山 実 花

本校ではクラス全員で一緒に踊り、それを競い合うダンスコンクールが昭和 23 年から続いている。今年度で 73 回を迎えた歴史あるダンスコンクールの現状を新型コロナウイルス感染症前後の様子とともにまとめる。このダンスコンクールではクラスで 1 つの作品を創りあげていくことに意義があるが、同じ振り付けをクラス 40 人程度で揃えて踊ることはある意味で強制的であり、全員がある種の型にはめ込まれる形となる。多様性や個の尊重が叫ばれる昨今において、それでもダンスをクラスで一丸となって踊ることには、何か意味があるのか。そして今後も継続していくためには、どのような視点が大切なのかを考えてみたい。

〈キーワード〉ダンス 創作ダンス 表現運動 体育 学校行事

1. ダンスコンクールとは

1.1. これまでのあゆみ

これまでに本校紀要において、山中(1959)や三浦(1977, 1988, 1999), 池田(2004)が校内ダンスコンクール(以下、ダンスコンクール)までのあゆみをまとめている。昭和 23 年から実施され、2023 年度で第 73 回を数える、歴史ある創作ダンスの校内規模のコンクールである。運動会の一部であった教師の振り付けによる「音楽運動」から脱し、生徒の生活経験や日常の感情から自由に創造的に表現することを大切にして、生徒自身が創作したダンスをコンクール形式で発表し競い合うところから始まった。その精神は今も受け継がれており、体育祭・文化祭とならぶ輝鏡祭の 1 つとして存続している。

1.2. ダンスコンクールの概要

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、2020 年度は中止をせざるを得なかったが、翌年より開催方法を模索し、少しずつ 2019 年以前のやり方に戻すように行事運営を検討してきた。2019 年度から今年度までの概要をまとめたので、そちらも参照いただきたい(表 1)。

各クラス 2 名のダンスコンクール実行委員会の生徒を中心に、ダンスデザイナー、衣装係、音源係を決め、輝鏡祭の統一テーマをもとにした各クラスオリジナルのダンスを創作する。1・2 年生がクラスごとに作品を創り、踊り、コンクール形式で競い合う行事として毎年 10 月下旬を目安に開催されている。会場は本校グラウンドで、生徒たちは裸足で(もしくはタイツで)踊る。7 月には各クラスで輝鏡祭のテーマに沿ったクラスのダンスのメインとなるサブテーマを決め始め、9 月中旬の文化祭後からは本格的に準備に取り掛かる。ダンスだけではなく、テーマに沿った衣装や音源、プログラムに掲載するダンス解説文やイラストもクラスごとに趣向を凝らし作成する。そのため、ダンスを全員で踊る、ということ以外にも様々な能力を発揮する場面が設けられている。

ダンスコンクール当日は、校内の教員や 3 年生、作楽会(同窓会)の方の投票による校内部門と、大学の先生や中学校の保健体育科教諭などダンスの専門家の方による特別審査員部門での評価が行われ、別で表彰される。2023 年度の審査基準は①全体としていかに作品タイトルが表現されているか ②空間の使い方(動作・隊形の工夫がされているか) ③音楽(動きとあっているか、曲のつながりはなめらかか) ④踊り込み(一

人一人の動きが十分生きているか、体を極限までつかっているか)の4観点で、校内部門は最も良いものを1つ選ぶ方式、特別審査員部門はそれぞれ10点の合計40点満点での評価を合計する。これとは別に衣装賞を設けており、作品を表現するのにふさわしい効果的な衣装か、という観点で、校内部門は1クラス選択、特別審査員部門は10点満点で採点したものを合算して決定する。

校内部門は2021年度からgoogleフォームを使つての集計を試みており、時間短縮や人的ミスを防ぐためのICT化に努めている。実際に集計時間は短縮され、大学生の招聘作品の上演中に表彰の準備が整うようになった。また、演技中は各クラスへのコメントを入力するフォームも設けており、ダンスコンクールが終わった後に、特別審査員のコメントと共に各クラスへ掲示され、フィードバックされる。

1.3. 体育の授業での扱い

体育の授業では1年生に対してのみ、ダンス単元を7~10時間程度行っている。

最初のオリエンテーションでは当時の資料として残されている下記の本元本校校長前田候子先生の言葉を引用して、生徒にダンスコンクールの意義や意味づけを伝えている。また、いくつかのダンス作品を鑑賞するが、生徒は過去の先輩の作品を見ることに特に意欲を示す。

「昭和23年、第1回目のダンスコンクールが開催された。それに出演された元本校校長前田候子先生は、「昭和20年に第二次世界大戦が終わり、戦後の混沌とした昭和23年、食べるものも、着るものも不十分で、みんなで何かをするなんて難しい状況だった。だから、**みんなで何かを一緒にできることが本当に嬉しかった。**」と語られた。集まるのが困難で、制服すら揃わない時代。歴史的に語り継がれていた『ファウスト』という作品では、「皆で揃えられる最低限の衣装」としてセーラー服がもちいられている。オーディオ機器のなかった当時の音楽は、ピアノの生演奏だった。今でも引き継がれている「クラス全員で」という基本方針は、「みんなで何かを一緒にできる」ことを願った当初の思いを引き継いでいる。(本校紀要50号からの抜粋)」

その後の授業では、筆者の赴任した2022年度に現代的なリズムのダンスも取り入れる等して工夫をしたこともあったが、基本的にはダンスコンクールに向けて創作ダンスの基礎事項を『改訂版 明日からトライ!ダンスの授業 動画付き』(大修館書店)を参考に、生徒に問いかけて引き出しながら授業をしている。ダンスコンクールを最後に据えていることもあり、カウントによらず隣の人と呼吸を合わせて、仲間とともに動けるように、という指導を心がけている。そのため、ウォーミングアップではペアの気配を感じとって動きを変える動作を入れたり、小作品作りのために段階を踏んでいく際には仲間の動きに対応するような動きを入れたりして、言葉を発さずとも人の動きに反応して対応できるようにすることを意識的に取り入れている。

1.4. 体育の授業での扱い(ダンスコンクール前)

1・2年生ともにダンスコンクール前の4時間(2023年度は台湾研修の関係で5時間と変更した)の体育の授業は生徒に委ねて、練習の時間にあてている。各クラス4名程度いるダンスデザイナーを中心に、その日の授業の内容を考えて運営してもらう。体育の授業はクラス全員が揃う貴重な時間でもあり、多くは隊形の移動や振りを揃えることに集中して練習している様子がみられた。今年度特別審査員部門1位のクラスのある1時間の授業をみてみると、隊形(立ち位置)を確認したあと音楽に合わせて踊る、ということを少しずつ確認しながら進め、最後に1回最初から曲に合わせて通して踊り、その通しで気になったところを今一度隊形と共に確認をする、ということをしてきた。このやり方はダンスコンクールの迫る1週間前あたりから他のクラスでも同様の傾向にあった。

2. ユニゾンとは

ユニゾンとは「グループで一定の動きが同時になされること」(J.M.Smith,1984)であり、中でも多数のメン

バーで同時に動く「同時のユニゾン」を踊りの開始時とクライマックスに用いることで、モチーフ（テーマに関する運動の最小単位）の理解に効果があるとしている。また「モチーフの表現は、多数のメンバーによって強められる（J.M.Smith,1984）」ことから、より多くの人数で同じ動きをすることは、その分だけテーマに関連する意味や意図を観客に訴える力が強くなっていく。

ここで考えたいのは、「個から引き出される動き」と「群のために与えられる動き」の兼ね合いである。授業でも問いかけて引き出して、それぞれの表現を互いに認め合いながら、より良い表現を見つけ出していく。友人の動きに呼応するようにして、時には真似をしながらも自分たちの心地よいひと流れをつくっていく。それぞれの表現を認めるどころから発しているにもかかわらず、ユニゾンでは、最終的に同じ振り付けという型に当てはめていくことにつながっている。もちろん、友人と共に同じ動きをすることで感じられる喜び、共感、共振、共鳴などとされる感覚や同期、同調なども表現される動きには一定の心地よさがあるとしても、自分から発していない、欲していない動きを強制させられる場面が発生している。

2.1. ダンスコンクールにおけるユニゾンの割合

今年度の各クラスの40人でのユニゾン部分を計測すると、表2のとおりとなった。左右対称（シンメトリー）になる動きもあったが、全クラスにユニゾンと呼ばれる部分が確認され、作品の1～2割を占めた。ユニゾンそのものの効果を生徒もうまく利用しており、特に作品が盛り上がる部分で使用するクラスが多くみられた。また特別審査員部門で1位のクラスは、表2とは別に、音楽に合わせずに10人程度で揃えて踊る振付が25秒程度確認され、10人以上で外的要素（音楽）に頼らずに自分たちの息遣いを合わせて踊るユニゾンを唯一用いていた。

表2 ユニゾンの時間とその割合(2023)

	ユニゾンの総時間	作品に占める割合
1R	0:49	18%
1K	0:28	11%
1U	0:26	9%
2R	1:00	21%
2K	0:48	16%
2U	0:45	18%

2.2. ダンスコンクールにおけるユニゾンの難しさ

ダンスコンクールは、クラス全員で踊るということに意味がある。クラス40人という数は他のダンスのコンクールと比較すると多く、一斉に揃えることに苦勞することがわかる。創作ダンスの全国大会の例として舞台上で上演されるAll Japan Dance Festival-KOBEでは1チームの上限30名、大学体育館で行われる日本女子体育大学主催の2023年度第76回全国中学校・高等学校ダンスコンクールは1チーム最大30名となっている。日本高校ダンス部選手権DANCESTADIAMではビッククラスで最大40名だが、演技時間は2分～2分30秒となっており、ダンスコンクールと比較すると演技時間が半分である。何かの大きなオープニング等のセレモニーなどで行われる事はあるかもしれないが、40人で揃えて踊る、という経験は高校生では限られた者だけにしかないといえる。

本校ではグラウンドを使う関係上、間口（横幅）約36m、奥行（縦幅）約19mをとることができるため、40人程度という人数が叶っている（外で踊る、というのもダンスコンクールの特徴の1つともいえる）。クラス一丸となって踊れるからこそ、手の高さや足の出し方といった細かなところまで統一するとすると、何度も繰り返して揃えて踊って覚えなければならないというプレッシャーもあると考えられる。ほんのわずかなズレが、その一体感の乱れを生み出してしまう。間違えないように、みんなと揃えなくては、という恐怖とも戦わなければならない。

3. 生徒の様子

短い期間で複雑な踊りを覚えるのはとても大変で、苦勞もするし、みんな揃えて同じように踊るということは、それなりのプレッシャーもある。しかし、生徒は同じ踊りをみんな揃えて踊ることを通して達成感も味わっている。動きを覚えるために誰かに教えてもらったり教えたりという友人同士のつながりが生まれ、何

度も一緒に振りや立ち位置を確認して、時間や空間を共にするという行為を通して、互いのつながりを少しずつ確認しているように見受けられた。生徒から「みんなの動きが揃ったり、移動がスムーズになったりなど、練習の成果が後で動画で客観的に見られたとき嬉しかった」「みんなで一つの作品を作り上げることができたというクラスの団結感が感じられて嬉しかった」（共に生徒の学習カードの記述より）という感想が出てくるということは、少なからず、生徒たちはクラスでユニゾンを踊る際に、踊りを強制させられるということが友人との絆を深める友人との仲を深める一助になっているということを感じていることがわかる。

3.1. 練習の様子

とはいえ、練習時間を多くとり、うまくいっているかというところでもない。練習が解禁される2学期中間考査後から約2週間、ダンスコンクール実行委員会が平日の朝・昼休み・放課後を20～30分ごとに区切って、全クラスが平等になるようにグラウンドと体育館を雨天も想定しながら割り振っている。休日の練習は2週ほどあったが、2週にわたるよりも2時間まとめて1回の方がいいだろうと担当生徒が配慮をして練習を組んでいた。それでも全員が揃うことはなく、全員が休日や昼休み等を返上して練習をすることが難しくなっているのが現状である。今年度はコンクールの1週間前に台湾へ研修に行く2年生もおり、体育の授業でもみんなが揃うことは難しく、当日まで全員が揃わないというクラスもあった。

3.2. 嫌な気持ちも抱え込みながら

全員が集まらないということはユニゾンを全員で揃えることにも支障をきたす。単に振り付けを覚えれば良いというわけではなく、位置や隊形の問題も生じるし、隣の人の息遣いを感じながら動かないと感じられない“揃っている”感じを体感することは出来ない。そのため、特にダンスデザイナーや踊るときに前後左右にいるはずの人がいないままの生徒は、全員でできないことに対してネガティブな気持ちを持たないわけではない様子だった。とはいえその一方で、練習に出たくない踊りたくないという気持ちを持つ人だっていたし、音響や衣装係りの担当者は練習以外の時間をわざわざ割かなければならず、その中で練習にも出なければ自分の時間を削って参加する生徒もいた。みんながちょっとずつ嫌な気持ちを抱えながら、ダンスコンクールが完成していくのを筆者は感じていた。

3.3. 教員からみて

そのような生徒たちの姿を見て、教員はどのように捉えているのか、本校の教員に生徒の取り組みについて回答してもらった。その結果「よくやっていた」が6割、「まずまずやっていた」と合わせると約8割を占める。過去の取り組みと比較することなく、目の前の委員会の生徒の働きや練習の様子を見てのこの割合となっていることが考えられる。「団対抗の体育祭や、各自が個性を發揮する場のある文化祭と比して、ダンスコンクールはクラスで1つの作品を創りあげる側面が強いと思います。創作の過程では、主張の衝突や葛藤に直面する時間を保障することが重要だと思います。」という貴重な意見も頂戴した。

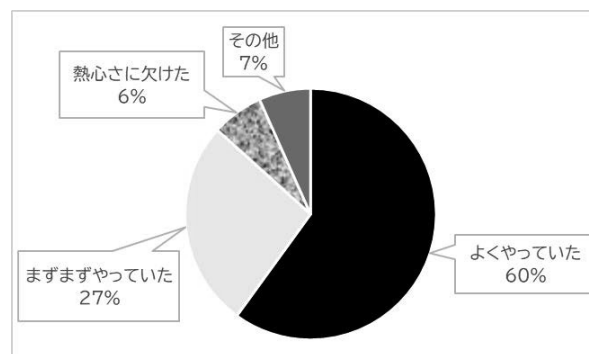


図1 教員アンケート 生徒の取り組みは...

4. 今後も続いていくために

ダンスを創りあげていくというときには、最終的に1つの振りを決めなければならないし、ある程度の型は決めなければならない。そもそもテーマを決める段階から、自分のやりたいと思うものにならないことも予想される。その時にきちんと向き合い、時にはきちんと争い合って納得をしながら決断していくという行動をとらせてあげられるかが、生徒が自分たちのダンスと向き合うときに必要なかもしれない。

まさに「個から引き出される動き」と「群のために与えられる動き」の兼ね合いでもある。自分自身はこう動きたいという気持ちがあるかもしれないが今は群のために動きを統制しよう、ここでは自分なりの動きを入れることでさらに表現が伝わるかもしれない、このようなバランスをその都度とりながらダンスに臨んでいることであろう。その理解を促すとともに、そうやって試行錯誤したり、葛藤したりする時間を保障してあげることが教員としてできることなのかもしれない。

みんなが均一なからだを持っていないのに、1つの動きに揃えることの難しさや大変さを感じ、それを乗り越えた先のおもしろさや楽しさを味わい、その思いをみんなで分かち合う。みんなが揃う気持ちのよいユニゾンまでの道のりはそれなりに険しいけれど、やるしかなく、それをさせる力がダンスにはあるのだと感じる。踊りを“強制”させられる中から、互いを理解し合って妥協点を見つけながら共にあろうとする“共生”の道を見出す姿が、これから生きていく生徒には必要なことなのかもしれない。

これまで70回以上続いてきたダンスコンクールが今後も続いていくためには、クラス一丸となってみんなで一緒に踊ることが本当に幸せなことだったという第1回の頃の気持ちに、今一度立ち返ることが必要なのではないかと思う。色々な選択肢も増えて学校自体の優先度が下がっている今、共に学ぶ意義や喜びがここには詰まっているのだと感じている。教員として、全員で踊るということがどのような効果をもたらすのかを言語化して伝えていくとともに、その良さを感じられるための生徒に対する支援を今後も考え続けていきたいと思っている。

そしてこのダンスコンクールが第1回の気持ちを忘れることなく、この先も続いていくことを願っている。

主な参考文献

- ・ 山中茂子.(1959).「運動会のダンス」お茶の水女子大学文教育学部附属高等学校教育研究会紀要5号.
- ・ 三浦良子.(1977).「校内ダンスコンクール—その教育的意義と歴史的変遷—」お茶の水女子大学文教育学部附属高等学校教育研究会紀要23号.
- ・ 三浦良子.(1988).「校内ダンスコンクールを考える—本校の実践例より—」お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要33号.
- ・ 三浦良子.(1999).「校内ダンスコンクールについての報告(3)—49回の軌跡—」お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要44号.
- ・ 池田(尾畑)三鈴.(2005).「校内ダンスコンクールの実態を探る—お茶の水女子大学附属高等学校の事例より—」お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要第50号.
- ・ 全国ダンス・表現運動授業研究会(編).(2021).『改訂版 明日からトライ!ダンスの授業 動画付き』東京:大修館書店
- ・ J.M.Smith. 林悦子・島内敏子訳(1984).『ダンス創作テクニック』東京:大修館書店
- ・ All Japan Dance Festival-KOBE. <https://www.ajdf.jp/index.html> (最終閲覧日:2024年4月19日)
- ・ 日本女子体育大学. 2023年度 第76回全国中学校・高等学校ダンスコンクール. https://www.jwcpe.ac.jp/event_social/dance/contest/2023.html (最終閲覧日:2024年4月19日)
- ・ 日本高校・中学校ダンス部選手権 DANCESTADIAM <https://www.dancestadium.com/high/> (最終閲覧日:2024年4月19日)

表1 2019年度から2023年度までのダンスコンクールの概要

	第70回(2019年)	中止(2020年)	第71回(2021年)	第72回(2022年)	第73回(2023年)
演技時間	5～7分		4～5分	3～5分	4～5分
マスク			全員が不織布マスクを着用	別途予算で購入し、全員が不織布マスクを着用	着用は個人に委ねるが、購入する場合は別途予算から支出
健康観察	・体育館とグラウンドは朝/昼休み/放課後の割り振りに従う ・土曜日1回、LHR1回、体育の授業最大4回 ・部活動と調整し、2週間前から15:15～17:10まで練習が可能 ・練習場所を提供した部活動は顧問の許可が得られれば～18:30まで部活動ができる		毎日健康観察・体温の入力をする ・体育館とグラウンドは朝/昼休み/放課後の割り振りに従う ・土曜日0～1回、LHR1回、体育の授業最大4回 ・教室内での練習は13人まで ・部活動と調整し、2週間前から15:15～17:10まで練習が可能 ・練習場所を提供した部活動は顧問の許可が得られれば～17:30まで部活動ができる ・作品時間を短くし、練習時間の短縮に努める	毎日健康観察・体温の入力をする ・体育館とグラウンドは朝/昼休み/放課後の割り振りに従う ・土曜日1回、LHR1回、体育の授業最大4回 ・教室内での練習は15人まで ・部活動と調整し、2週間前から15:15～17:00まで練習が可能 ・練習場所を提供した部活動は顧問の許可が得られれば～17:30まで部活動ができる	・体育館とグラウンドは朝/昼休み/放課後の割り振りに従う ・土曜日2回、LHR1回、体育の授業最大5回 ・部活動と調整し、16日前から15:15～17:00まで練習が可能 ・練習場所を提供した部活動は顧問の許可が得られれば～18:00まで部活動ができる
演技			・身体接触のある動きをなくす ・密集する動きも極力減らし、密集する場合は時間を短くする。作品時間内を2部構成または3部構成にし、一つの部に出演する生徒の人数を減らすような工夫を提案する。 ・作品の中では声を出さない。	・作品時間を短くし、練習時間の短縮に努める ・過度な身体接触のある動作はなくす ・密集する動きは極力減らす ・作品の中で声を出さない	
審査方法	・特別審査員部門 テーマ表現・空間・音楽・踊り込みの4項目各5点、20点満点 ・校内部門 3年生/教職員/作業会 1人1点(1票) ・衣装賞 校内部門の審査員は1人1点(1票) 特別審査員は5点		・特別審査員部門 4項目各10点、40点満点 ・校内部門 3年生/教職員/(作業会役員) 1人1点(1票) ・衣装賞 校内部門の審査員は1人1点(1票) 特別審査員は10点	・特別審査員部門 4項目各10点、40点満点 ※空間の使い方の項目に「コロナ対策がされているか」を追加 ・校内部門 3年生/教職員/作業会役員 1人1点(1票) ・衣装賞 校内部門の審査員は1人1点(1票) 特別審査員は10点	・特別審査員部門 4項目各10点、40点満点 ・校内部門 3年生/教職員/作業会役員 1人1点(1票) ・衣装賞 校内部門の審査員は1人1点(1票) 特別審査員は10点
集計方法	・特別審査員部門 評価用紙に記入 ・校内部門 1人1枚紙を配付		・特別審査員部門 評価用紙に記入 ・校内部門 googleフォームで集計 ・衣装賞 校内部門はgoogleフォーム、特別審査員は紙面で出し、後で集計する	・特別審査員部門 評価用紙に記入 ・校内部門 googleフォームで集計 ・衣装賞 校内部門はgoogleフォーム、特別審査員は紙面で出し、後で集計する	・特別審査員部門 評価用紙に記入 ・校内部門 googleフォームで集計 ・衣装賞 校内部門はgoogleフォーム、特別審査員は紙面で出し、後で集計する
表彰	・特別審査員部門 2位まで ・校内部門 2位まで ・衣装賞 1位まで		・特別審査員部門 2位まで ・校内部門 2位まで ・衣装賞 1位まで	・特別審査員部門 2位まで ・校内部門 2位まで ・衣装賞 1位まで	・特別審査員部門 2位まで ・校内部門 2位まで ・衣装賞 1位まで
観客	保護者もOK		1・2年生はなるべく距離をとる。3年生は教室でWebex配信されたライブ映像を見る	校内のみ(保護者はなし)	保護者もOK